

## 在日ブラジル人学校の子供の生活と健康 第 I 報 ——ブラジル人学校教職員へのインタビュー調査から——

武井佑真 東京学芸大学附属高等学校  
中下富子 群馬パース大学看護学部看護学科  
齋藤千景 埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：在日ブラジル人学校、子供、生活、健康

### 1. はじめに

平成 2 年 6 月「出入国管理及び難民認定法」<sup>1)</sup>の改正が施行され、日系人を含む外国人の滞日が増加し、滞日外国人に同伴する子供の数も増加している。また、文部科学省の学校基本調査<sup>2)</sup>より、公立学校に在籍している外国人児童生徒数は年々増加傾向にあり、平成 26 年 5 月 1 日現在 73,289 人が在籍している。その中で日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語別在籍状況はポルトガル語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、英語、韓国・朝鮮語の順に多いことが報告されている<sup>3)</sup>。また、文部科学省<sup>4)</sup>が高等学校相当として指定した外国人学校一覧においてブラジル人学校は全 38 校中 29 校と高い割合を占めており、ポルトガル語を母語とするブラジル人の児童生徒数の多さ及び支援の必要性が考えられる。

ブラジル人学校は平成 2 年 6 月「出入国管理及び難民認定法」<sup>1)</sup>の改正が施行されて以後、日本に定住する日系ブラジル人が急増したことに伴って設置される学校が増加し、平成 23 年 5 月現在では国内に 72 校のブラジル人学校がある。ブラジル人学校は最初、ポルトガル語の補習塾や託児施設として始まっていることが多い。ブラジル人学校設立の背景要因は、日本の学校への不適應や不就学児の増加、母語教育を通じた母文化とアイデンティティーの保持、帰国を望んで来日する保護者からの要望の高まりが挙げられる<sup>5)6)</sup>。ブラジル人学校はブラジルの教育省の認可のみの学校、ブラジルの教育省の認可と各種学校・学校法人化・準学校法人化が認められた学校、公立学校に対する補習校(学童)の三つに大きく分類され、多くの学校がブラジルの教育課程に基づいて教育を行っている。ブラジルの教育省の認可を受けている学校は現在 39 校あり、2003 年の省令改正によりブラジル教育省の認可を受けている学校の修了資格が日本においても正規のものと認められ、ブラジル政府認可校の中等教育課程修了者にも日本の国立大学の受験資格が与えられたが、保護者の経済力の低さや言語力不足による学習の遅れ等により多くの子供たちは高校・大学進学が困難な状況にある。

また、ブラジル人学校が設立された当初は各種学校に認可されていない教育施設のみであったが、その教育環境や経営状況の改善のために文部科学省はブラジル人学校の各種学校設置・準学校法人設立の支援の促進を行い、平成 23 年 11 月現在、12 校が認可されている。しかし、ほとんどの学校が認可を得られず、国や地方自治体から教育助成や補助金を受けることができないため、授業料は相対的に高く、保護者の負担が大きい。帰国を望む保護者は帰国後の子どもの教育や母語の保持等を求めて経済的に厳しい状況にありながらもブラジル人学校へ通わせるという現状が見られる<sup>8)</sup>。また、出稼ぎ労働者として来日するブラジル人を対象とした研究においては、ブラ

ジル人が来日する目的としてブラジルでの企業や、住宅や自家用車を購入するといった生活改善などの金銭的理由が主であり、多くの出稼ぎ労働者は帰国することを前提として来日する<sup>9)10)</sup>。また、日系ブラジル人は転職が多く、その理由として2,3年で帰国を考え来日する場合、より時給の高い職場を求めることや、派遣業者で社宅・アパートを用意しているため身軽に引っ越しができること、正社員ではないため雇用形態が不安定であることが挙げられる<sup>10)</sup>。

これらの研究から、ブラジル人学校の設立の背景として、出稼ぎとして来日するブラジル人は生活改善などの金銭的理由を目的としているため帰国を望む者が多いこと、帰国後の子供の教育や母語の保持を求める保護者の要望が挙げられる。しかし、教育助成や補助金を得ることが困難であるため、授業料が高くなり保護者の負担が大きくなることや、言語力不足等により高校及び大学進学が厳しい状況にあることが明らかとなっている。

石戸ら<sup>11)</sup>は在日外国人の児童生徒の課題として成績・勉強・進学関係の問題、日常生活・食生活関係の問題、いじめ・友人関係の問題があることを報告している。朝倉<sup>12)</sup>は日系ブラジル人が多く住む愛知県の代表的な二つの市の公立・小中学校に通う日系ブラジル人児童生徒を対象に調査を行い、日本で生活不適應やストレスを抱えていることを報告している。掛札ら<sup>13)</sup>はストレス症状の高さが学校適応感や日本の社会生活・環境への適応困難度などと有意な関連について報告している。また、掛札<sup>14)</sup>は日系ブラジル人生徒のメンタルヘルスに関する研究から異文化接触におけるメンタルヘルス上のリスクファクターについて、適応感と異文化要因の関連や言語の障壁、日本語習得度、日本人生徒及び教師との関わり、家庭での問題などがあると明らかにしている。他にも金山<sup>15)</sup>は日系ブラジル人の集住地区と散在地区を対象に在日ブラジル人児童の心理適応についての比較を行い、集住地区に住む児童の方が「ひきこもり」得点や「攻撃的行動」得点が高く、必ずしも同じ国籍のクラスメイトがいるかどうかが良い心理適応に繋がるわけではないことを明らかにしている。

これらの研究より日本に在住するブラジル人の児童生徒は成績や進学、食生活、友人関係などに不適應を感じ、異文化での生活において適応感や言語の障壁、日本人生徒や教師との関係などがメンタルヘルス上のリスクファクターとなっていることから、日本に在住するブラジル人の児童生徒は学校生活及び社会生活において多くのストレスを抱えている現状がある。

生活習慣や生活実態に関する研究において調査対象はブラジル人学校及び日本の公立小学校に通う児童生徒であり、ブラジル人が集住している地域で調査が行われている。小内<sup>5)</sup>は放課後や交友関係等に関して調査を行い、この研究によって放課後にスポーツをする子どもが多く、交友関係に関しては日本の公立学校に通うブラジル人の子どもよりも少ないことを報告している。また、岩村<sup>8)</sup>は子ども達の生活実態及び生活意識の変化、それらと学業などの関係を検討し、放課後の主な活動や子ども達の悩み、相談相手、子ども達の成績及び努力に関する自己評価と年齢・潜在期間の関連を明らかにしている。ブラジル人学校の教師に関する研究については、教師を対象に行われている研究はほとんどみられない。小内<sup>5)</sup>によるブラジル人学校関係者へのアンケート調査の結果報告や児島<sup>16)</sup>によって教師へのインタビュー調査を通して教師の生活史や日本での経験が教師の仕事にどのように織り込まれながら、独自の教育観や教育実践を生みだしているのかが報告されている。藤本<sup>17)</sup>は日系ブラジル人の子どもの生活課題から支援の方策について検討している。また、ブラジル人学校は学校種別に関係なく学校保健安全法やスポーツ振興センター法の対象外であり、ブラジル人学校に通う子供たちの健康を守る体制は日本社会において未だ構築されていないと報告されている<sup>18)</sup>。そのためブラジル人学校に通う子供たちの中には健康診断

を受けた経験がないという子供たちもいる。多く集住する地域では NPO 法人やボランティア団体、国立大学の地域貢献事業として健康相談や健康診断、病院紹介等を行い、健康面の支援を行っていると報告している<sup>19)20)</sup>。大谷<sup>19)</sup>は日系ブラジル人の子供たちの抱える健康課題として気管支喘息やアトピー性皮膚炎、腎障害、高血圧などを患う傾向にあるが、保護者の多くは健康保険に加入していないため、医療費が高額であり、医療機関に行くことに対して消極的であり、ブラジルからの輸入雑貨を販売している店で購入したサプリメントやブラジルに暮らす親戚から送ってもらった薬を服用させたり、教会で祈ったりするなどして対処していると報告している。ブラジル人に限らず、在日外国人への母子保健や健康に関する情報及びサービスは不足しており、行政と NPO 法人との連携のもと進める必要がある。

このように日本に在住するブラジル人児童生徒の生活については放課後の活動内容や交友関係の少なさなどが示されており、健康課題としては虚血性心疾患などの生活習慣病関連因子として日本と異なる食生活習慣が関連していることが報告されている。地域看護の視点からの調査においても異なる文化や習慣への理解を深めた支援等が必要という認識がされている。しかし、健康課題への支援としてはブラジル人が集住する地域において NPO 法人やボランティア団体等による健康相談や健康診断が行われているのみであり、母子保健や健康に関する情報やサービスが不足している現状が示されている。

先行研究から日本に在住するブラジル人児童生徒が学校生活において抱えている不適応やストレスについて研究がされている。また、食習慣の差異が生活習慣病の関連因子となっていることや、地域看護の視点から文化の差異への理解を深めた上で支援を行うことの重要性を示すなど、在日外国人を対象とした生活習慣への研究が多くみられている。

しかしながら、日本に在住するブラジル人の子供たちの健康面を重視した学校生活、家庭生活について明らかにした研究はほとんど見られず、放課後の活動や生活意識、交友関係等についての研究などに限られている。日本においても母国での生活習慣を受け継いで、どのような生活を行っているのかを把握し、母国の生活習慣等の実態を踏まえた上で日本での健康支援に生かす必要があると考える。

そこで、本研究は、ブラジル人学校に勤務する教職員を対象としたインタビュー調査により、ブラジル人学校に通う子供たちの学校生活や家庭生活と健康に関する現状と課題を明らかにすることを目的とした。本研究は日本の学校現場における外国籍の子供たちの健康支援に資する意義ある研究と考える。

## 2. 方法

### 2-1 対象

関東・中部地区にあるブラジル人学校 8 校に勤務する教職員 26 名

### 2-2 調査方法

半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。事前にインタビュー調査の同意を学校への電話で得る際に、記述での回答を希望した場合は、インタビューガイドへの記述による回答とした。

## 2-3 調査期間

平成 27 年 9 月～12 月

## 2-4 調査内容

- (1) 年齢及び性別、来日年数、教職員の経験年数（ブラジル及び日本での経験年数）
- (2) 日本のブラジル人学校で働くことになった経緯
- (3) 日本で生活をするブラジル人の子供たちが抱える教育課題
- (4) ブラジル人学校の子供たちへの教育の特徴及び指導上の配慮事項
- (5) ブラジル人学校の子供たちの生活習慣と食習慣等における日本との違い
- (6) 日本で生活をするブラジル人の子供たちが抱える健康課題

## 2-5 分析方法

- (1) ブラジル人学校に勤務する教職員 26 名のうち、4 名がインタビュー調査、22 名から記述による回答を得た。インタビュー調査による内容は質的帰納的分析方法による分析を行った。インタビュー内容について逐語録を作成し、教職員の教育及び健康に関する文脈を抽出し、データから類似する意味内容を集めてサブカテゴリとして命名した。さらに、類似する意味内容とするサブカテゴリを集めてカテゴリとして命名し、整理、分類した。
- (2) インタビューガイドへの自由記述により回答を得られた内容についても同様に教職員の教育及び健康に関する文脈を抽出して切片化し、類似する意味内容を集めて、サブカテゴリとして命名し、インタビュー調査結果のカテゴリに分類した。

## 2-6 倫理的配慮

- (1) 本研究は、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会の承認を受けた（受付番号 H27-12）。
- (2) 事前に対象校の校長宛てに依頼文書と調査用紙を郵送し、電話にて校長へ研究の趣旨、調査内容、プライバシーの保護等個人情報の保護について説明を行い、理解と同意を得た。
- (3) 翻訳は、埼玉大学関係者の家族である日系ブラジル人の方にしていただき、インタビューガイド及び同意説明書、同意書は日本語及びポルトガル語に翻訳したものを使用した。
- (4) 調査への参加は任意とし、教職員には、当日調査実施前に同意説明書による説明を書面及び口頭で行い、同意書によって研究参加の同意を得た。インタビュー中に同意の撤回を申し出た場合には、即刻インタビューを中断した。その際、不利益を受けることは一切なく、それまでに得た内容については特定できる情報は一切用いないことを事前に伝えた。

## 3. 結果

### 3-1 対象教職員の属性

ブラジル人学校教職員の属性は表 1 に示した。教職員の性別が女性 16 名、男性 5 名、不明 5 名であった。教職員の平均年齢は 45.8 歳（標準偏差±9.0 歳）、教職員の平均来日年数は 15 年（標準偏差±9.1 年）、教職員の平均の教員経験年数は 12.4 年（標準偏差±7.6 年）であった。教職員の職位は教諭 16 名、校長 4 名、理事長 1 名、不明 5 名であった。表 1 ではインタビュー

に答えてくれた対象者を A～D、インタビューガイドへの記述により答えてくれた対象者を e～z とした。

表 1 ブラジル人学校教職員の属性

教職員	年齢（歳）	性別	来日年数（年）	教員経験年数（年）	職位
A	42	女	24	5	校長
B	44	女	22	1	教諭
C	59	女	23	18	校長
D	71	女	27	21	理事長
e	46	女	20	20	教諭
f	37	男	8	4	教諭
g	47	女	19	15	教諭
h	32	男	6	10	教諭
i	43	男	10	16	教諭
j	34	男	1	5	教諭
k	46	女	11	26	教諭
l	58	女	9	6	教諭
m	不明	不明	不明	不明	不明
n	不明	不明	不明	不明	不明
o	不明	不明	不明	不明	不明
p	不明	不明	不明	不明	不明
q	不明	不明	不明	不明	不明
r	51	女	24	4	校長
s	47	女	20	8	教諭
t	43	女	2	25	教諭
u	41	女	2	15	教諭
v	36	女	4	11	教諭
w	43	女	24	19	校長
x	41	男	9	4	教諭
y	51	女	24	9	教諭
z	50	女	26	19	教諭
平均	45.8		15.0	12.4	
標準偏差	9.0		9.1	7.6	

### 3-2 ブラジル人学校の子供たちの学校生活と健康の特徴

322 件のデータが抽出され、52 項目のサブカテゴリ、11 項目のカテゴリ、3 項目のコアカテゴリに分類された（表 2）。3 項目のコアカテゴリは、【日本の学校とあまり変わらないブラジル人学校の子供の健康課題】【母国と日本を包含したブラジル人学校の教育】【母国の生活文化と教育】であった。以下に、それを構成するコアカテゴリごとに述べる。なお、カテゴリは、コアカテゴリを【 】, カテゴリを [ ], サブカテゴリを < >, データを「斜体」で示した。

#### (1) 【日本の学校とあまり変わらないブラジル人学校の子供の健康課題】（表 2）

このコアカテゴリは、[感染症やアレルギー疾患の多い健康課題] [栄養バランスの欠如や情報機器の使用時間の多い日常生活] という 2 項目のカテゴリ、サブカテゴリ 12 項目、データ 48 件で構成された（表 2）。

表2 在日ブラジル人学校の子供の生活と健康カテゴリー一覧

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	データ件数	
日本の学校とあまり変わらないブラジル人学校の子供の健康課題	感染症やアレルギー疾患の多い健康課題	アレルギーが多い	10	
		インフルエンザなどの感染症の罹患	7	
		居住地域の状態に伴う呼吸器関係の病気が多い	7	
		肥満が気になる	2	
		精神的な問題	2	
		齲歯が多い	1	
		視力低下が多い	1	
	栄養バランスの欠如や情報機器の使用時間の多い日常生活	偏食や栄養バランスの欠けた食事	6	
		学校生活以外での遊ぶ時間の不足	6	
		ゲーム・パソコン・携帯の使用時間の多さ	4	
		学校生活以外での運動時間の不足	1	
		読書時間の不足	1	
	2項目		12項目	48
	母国と日本を包含したブラジル人学校の教育	学力蓄積の困難さと言語力不足に伴う子供の将来への懸念	日本語とポルトガル語の言語力不足による将来への不透明さ	20
日本の文化への不適応			7	
確立できないアイデンティティーによる子供の精神的な不安定さ			4	
引越しと転校の多さに伴う子供への影響			3	
ブラジルの文化や歴史、言葉を知らず成長することへの懸念			3	
日本人との交流のなさ			2	
異文化で生活することによる学力蓄積の困難さ			1	
日本で過ごす日系ブラジル人の子供たちのロールモデルがない			1	
日本の生活文化を意識した子供への指導		高度なレベルの日本語の指導	10	
		広い社会関係・交流関係をもつことの指導	11	
		日本の文化の指導	4	
		国籍や人種にとられない人間関係の形成の大切さの指導	4	
		学校での定期健康診断の実施	3	
両親の子どもの教育への無関心さ		両親の職業の不安定さによる子供の教育への計画性や責任のなさ	15	
		両親の職業の多忙さによる子供とのかかわり不足	14	
保護者と子どもへの積極的なかかわり		学校生活以外での積極的な子供とのかかわり	16	
		子供の問題解決のための両親へのアドバイス	5	
ブラジルの文化を意識した子供への指導		ブラジルの文化の紹介	7	
		日本語とポルトガル語のバイリンガルを目指した言語指導	5	
		母国の教育課程に基づいた学校の定める教科書での指導	4	
		ブラジルの文化や言語を理解する大切さの指導	2	
		インターネットで調べた情報と過去の経験による指導	1	
ブラジル人学校経営の困難さ		ブラジル人学校の厳しい経営	8	
		日本の公立学校への転校の困難さ	1	
6項目		24項目	151	
母国の生活文化と教育	母国の生活文化と社会環境	調味料の違いや肉類の多い食生活	30	
		ハグや時間意識の異なる日常生活のルール	13	
		治安が悪い故の緊張した生活	3	
		交通機関や生活環境の整備の不十分さ	2	
		宗教によるメンタルヘルスの安定	2	
		健康意識の低さ	2	
	母国の教師と社会的認識	ブラジルの教師の社会的地位の低さと待遇の悪さ	15	
		教師としての使命感や努力する姿勢	5	
		教員養成カリキュラム	3	
	母国の学校生活	心身ともに安定した健康な子供の育成	24	
		午前と午後の二部制による教育課程	12	
		私立学校と公立学校の教育格差	4	
		家庭で行う子供のしつけと役割	3	
		教師と生徒の友だちのような関係	2	
		教科指導を中心とした学校の役割	2	
		様々な国籍の子どもが在籍	1	
	3項目		16項目	123
3項目	11項目	52項目	322	

〔感染症やアレルギー疾患の多い健康課題〕は、ウイルス性の＜インフルエンザなどの感染症＞や、花粉症、高温多湿の時期のアトピー性皮膚炎などの＜アレルギーが多い＞、工場が多くある地域の学校においては空気の汚染が原因とされる＜居住地域に伴う呼吸器関係の病気が多い＞ことであった。また、定期健康診断を実施しており、＜肥満が気になる＞＜齲歯が多い＞＜視力低下が多い＞、転校や引っ越しに伴う子供の＜精神的な不安定さ＞や鬱などであった。

〔栄養バランスの欠如や情報機器の使用時間の多い日常生活〕として、深夜にポテトチップスなどの菓子類や子供の好きな食べ物ばかりを摂取し、加工食品やファーストフードに偏った＜偏食や栄養バランスの欠けた食事＞であった。

「毎日朝早く学校に来て夜遅くに帰宅する子供たちと、夜遅くに両親が帰宅する場合、彼らはよく加工食品やファーストフードを買ってくるようになります。また他のケースとしては、一日中子供にかまわってあげられないと子どもが両親にキャンディなどお菓子をねだった時に、両親は申し訳ない気持ちから子供たちの要求を断ることができず欲しいものを与えてしまいます。そのような日常の消費習慣の方が問題と考えています。(C-10)」

また、学校ではスマホを預かる袋を準備したり、授業中に使用したりしないというルールを作るものの＜ゲーム・パソコン・携帯の使用時間の多さ＞、日常生活のほとんどが学校生活で＜学校生活以外での運動時間の不足＞、散歩やプール、保護者と出かけるなど外に出かけることをしながら、プレイステーションやLINE、スマホのゲームアプリなど家にこもってずっとゲームをしている＜学校生活以外での遊ぶ時間の不足＞であった。

すなわち、ブラジル人学校の子供の健康課題は、感染症、肥満、齲歯、視力低下、アレルギー性疾患、居住地域に伴う呼吸器関係の疾患、精神的な問題、及び情報機器の使用時間の多さ、学校生活以外での遊ぶ時間や運動時間の不足、偏食や栄養バランスの欠如した食事といった【I. 日本の学校とあまり変わらない健康課題】が示された。

## (2) 【母国と日本を包含したブラジル人学校の教育】(表 2)

このコアカテゴリは〔学力蓄積の困難さと言語力不足に伴う子供の将来への懸念〕〔日本の生活文化を意識した子供への指導〕〔両親の子供の教育への無関心さ〕〔保護者と子供への積極的なかわり〕〔ブラジルの文化を意識した子供への指導〕〔ブラジル人学校経営の困難さ〕というカテゴリ 6 項目、サブカテゴリ 24 項目、データ 151 件で構成された。

〔学力蓄積の困難さと言語力不足に伴う子供の将来への懸念〕では、＜日本語とポルトガル語の言語力不足による将来への不透明さ＞として、家庭や学校で使用する言語が日本語とポルトガル語の両方を使用しているため、両方とも十分な言語力が身に付かないこと、日本の公立学校に通っている子供がポルトガル語を十分に話すことができず、保護者との意思疎通を十分に図ることができないことであった。また、日本の公立学校でのいじめや、日常会話での日本語ができて、学習のための言語力が不十分で高校・大学への進学が困難であり、言語力不足であることをコンプレックスに感じて気持ちの落ち込みが生じていた。

「日本の学校へ通っていた子供がブラジルに帰省した場合、ポルトガル語の読み書きができない状態で帰省することになります。(b-4)」

また、日本の食文化に適応できず、偏食や栄養バランスの欠けた食事を摂っており、日本の厳しい指導や厳格な教育システムに馴染めないという＜日本の公立学校への不適応＞であった。

「日本の学校に通うブラジルの子供たちの中で日本の食文化に慣れない子供たちは、学校では先生に怒られない程度に最低限のものを食べます。そして、お腹がすいた状態で家に帰り最初に目に入ったものを食べます。たいていの場合、それはサラダや果物ではなく、スナック菓子などのジャンクフードや飴、パンなどです(C-13)」  
「様々な違いがあります。多くの家族はブラジルの習慣をまだたくさん維持していて、日本へ適応する・なれるための邪魔をしています。(q-4)」

2つの国の文化と接して生活をする中で、どちらの国にも属さないという気持ちが子供たちに生じることや、母国であるブラジルの文化や言語、歴史について知らないことが原因となり、アイデンティティーが確立されず、将来の目的を持たない<確立できないアイデンティティーによる子供の精神的な不安定さ>であった。

「私たちはブラジルがどの様な国なのかなど、できる限りブラジルのリアルなイメージを伝えることに気を使っています。なぜなら、彼らは日本で生まれたが実際のところ日本人ではないのです。例えば、私はよく彼らに次のような会話のやりとりは良くないと言います。『君の出身地はどこ?』と聞かれ彼らは「ブラジル」と答えます。そうすると、『君の国について教えてほしい』と再び聞かれます。このようになると子供たちは、ブラジルについて何も知らないために何も答えることが出来ないことにとっても失望します。(C-5)」

さらに、<引っ越しと転校の多さに伴う子供への影響>により子供たちは不安を抱え、やる気もなくなってしまっていた。定期的にブラジルに帰省することができる家庭は少なく、多くの子供は<ブラジルの文化や歴史、言葉を知らずに成長する>。<異文化で生活することによる学力の問題>も生じて、勉強したことが子供たちの頭のなかでバラバラになり、知識の断片化が生じていることが困難さや、学校以外では友人がおらず、近所や身近において<日本人との交流の無さ>もあった。

[日本の生活文化を意識した子供への指導]では、日本語検定を積極的に受けさせたり、日本語教師のボランティアによる日本語の授業を設けたりするなど言語力を向上させるための<高度なレベルの日本語の指導>を行っていた。また、日本人の輪に入って人間関係の形成やコミュニケーションを積極的にとったり、日本人の大学生や外部講師を臨時講師として学校へ招いたり、日本人と交流する機会を増やしく広い社会関係・交流関係をもつことの指導>、日本に親しみなじむための<日本の文化の指導>も行っていた。

「よさこいソーランをやってるね。子供たち、やりたい人も金曜日に7時～9時まで。私がいつも言うのはブラジルでは沢山みんなやっていますね。日系人が教えてる。ここは日本人が教える。だから、これは本当のよさこい、本当の和太鼓ね。だから日本人に習う、それが子供たちも『本当だよ。』って。その子はもう卒業したけど、今も5年間よさこいをやってる。あの重い旗をもってる。よさこいを覚えたからとても人生変わった。だから私にとっても幸せ。その子はダンスが好きで、今東京で働いてる。色んなチャンスがあったらありがたいですね。(B-13)」

日本人と交流する機会を設けることで<日本の習慣や文化、言語、住んでいる国を理解する大切さを伝える指導>を行って、子供たちの学習意欲を育むような指導を行っていた。

「日本の習慣や、自分が住んでいる国の大切さを教えるよう試みています。あと、ブラジル人学校にいても、日本語を覚える大切さも伝えるようにしています。(g-4)」

子供たちの健康状態を把握するために、<毎年学校で行われる定期健診の実施>をしていた。

[両親の子供の教育への無関心さ]では、<両親の職業の不安定さによる子供の教育への計画性や責任のなさ>は、両親の職業の不安定さが原因となり、来日当初の予定とは異なる日本で



の長期滞在や子供たちの転校、引っ越しが多く、ブラジルへ帰国するのか日本に滞在し続けるのかについて両親に迷いがあり、子供の教育についても日本の公立学校とブラジル人学校との転校を繰り返すなど中途半端な状態になることが多かった。また、ブラジル人学校に通わせていた保護者が日本での長期滞在を決め、子供を日本の公立学校に入学させた場合、人間関係の形成や学力の面で学校に適応する上で大きな困難感を抱えていた。〈両親の職業の多忙さによる子供とのかかわり不足〉は、両親の職業が多忙で残業などにより、帰宅時間が遅くなるため、子供との会話やかかわり不足から、子供たちが保護者の愛情不足を感じていた。

「仕事もストレス溜まってる。会社でロボットみたいになる。本当に幸せじゃない。日本で長い時間ですよ。本当に泣くまで、それくらいになって学校へ来る親もいる。子供のことができない。育てられないみたい。なぜかという、自分は、むしろ自分を助けてくださいみたいな感じになっている。(B-28)」

そのため、教職員は「保護者と子どもへの積極的なかかわり」をもち、〈学校生活以外での積極的な子供とのかかわり〉として、仕事が多忙である保護者の代わりに子供たちの受診につき添ったり、夜まで子供たちを学校で預ったりしていた。スポーツ活動を行う十分なスペースや時間が学校にないため、休日に学校の周囲を散歩して公園で遊んだり、祭りやキャンプに連れて行ったりするなど休日の課外活動を担っていた。

「この学校は1日。なぜかという、みんな仕事をやってるね。だから6時から大体7時くらいまで、7時半くらいまでは送迎をします。中学生は1時半くらいまで。でも、1時半でも帰りたくない子はいる。なぜかという誰もない。近所の方はみんな日本人。だから、つまらないから、学校にいたいね。それで6時からになると朝ごはん、あとお昼ご飯、前は晩御飯もだったね。あと、お風呂も、シャワー。でも、それは家族ね、晩御飯とシャワーは家族ね。でも10年くらい前までは全部やってた。先生たちはやっぱり、家族みたいになる。(B-1)」

また、子供たちの丁寧な観察を行い、子供たちが抱えている課題や能力の向上に努めること、学校外での友人がいない子供に対しては丁寧な指導をしていた。

「態度や振る舞いを観察して生徒がどんな問題を持っているのかを見抜くようにしています。(V-5)」

子供たちの問題に対してなるべく効率的に解決するよう、保護者とメールや連絡帳を用いて頻りに連絡をとり、保護者と協力して子供への支援を行っていた。また、宿題を出すことによって保護者と子供のコミュニケーションを促進したり、保護者の仕事の多忙さを考慮したりして宿題の量を調整するなどの配慮を行い、〈子供の問題解決のための両親へのアドバイス〉を行っていた。

「ブラジルの文化を意識した子供への指導」では、子供たちはブラジルで行われているパーティーや行事に参加した経験がないため、ブラジルの文化を体験することができるよう意識して行事を行っていた。ポルトガル語だけでなく、歴史、音楽、詩など〈ブラジルの文化の紹介〉、また〈日本語とポルトガル語のバイリンガルを目指した言語指導〉を行っていた。

「私のクラスでは日本の学校からきた生徒がたくさんいます。生徒の両親はブラジル人で、日本語しか話しません。この子たちには、家ではポルトガル語を話すようお願いしています。(p-5)」  
〈ブラジルの文化や言語を理解する大切さの指導〉をすることによって、ポルトガル語を忘れないようにするために子供たちの学習意欲を刺激し、母国の言葉を知ることで文化や考え方を知る

ことができることを指導していた。さらに、ブラジルで使用されている教科書を用いた指導では、＜インターネットで調べた情報と過去の経験による指導＞を行っていた。

〔ブラジル人学校経営の困難さ〕として、デフレーションなどの社会の経済状況や教師の不足、政府からの支援や資金の不足、言語力、経済力の不足が原因となり各種学校・学校法人化・準学校法人化することが困難であり、日本の政府からも支援や資金を得られていないことという＜ブラジル人学校の厳しい経営＞状況があげられた。

すなわち、【母国と日本の両国を包含したブラジル人学校の教育】では、教職員は両親との頻繁な連絡を取り合って支援をしていた。ブラジルの文化や、ブラジルの教育課程に基づいた最新の情報を取り入れた指導とともに、日本の日常生活のルールや習慣を指導し、日本人との交流を促していた。しかしながら、子供たちは、両国の言語力不足に伴う学力低下やコミュニケーションの不足によって、日本への不応適や、長期滞在による転校や引っ越しが多くなることで精神的な不安定さ、将来への不透明さ等も抱えていた。また、ブラジル人学校の経営において社会の経済状況や教師の不足、政府からの支援や資金不足といった課題が示された。

### (3) 【母国の生活文化と教育】(表 2)

このコアカテゴリは、〔母国の生活文化と社会環境〕〔母国の教師と社会的認識〕〔母国の学校生活〕という3項目のカテゴリ、サブカテゴリ16項目、データ123件で構成された。

〔母国の生活文化と社会環境〕として、＜調味料の違いや肉類の多い食生活＞では、朝食は軽食で、伝統料理の違いによるブラジルでの牛肉などの肉類や果物の摂取量の多さ、日本では魚や加工食品、納豆や刺身、調味料の多さであり、飲み物として日本では氷をいれたアイスコーヒーやジュースなどを飲むが、ブラジルでは炭酸飲料やジュースを飲んでいて。

「日本の今は慣れてきてるけど、ブラジル人が一番戸惑うのは砂糖を使った料理でブラジル人食べないから。ボランティアの先生に教えてもらって子ども達が肉じゃがを作ったんですよ。砂糖入れるって。そういうのは無いです。ブラジルの主食であるお米と豆が温かいうちじゃないと食べないって。冷えたらお腹壊すっていうのがあって。あのコーヒーも冷たいコーヒー飲まないです。コーヒーも冷えたらお腹壊すってことが当たり前なんですけど、日本に来たブラジル人は結構冷たいのを飲んでますよね。でも最初はみんな戸惑った。その冷たいコーヒー、アイスコーヒーなんてとんでもないって。(A-6)」

座り方等の日本人の礼儀の良さ、時間を守ることへの意識など＜ハグや時間意識の異なる日常生活のルール＞、＜治安が悪い故の緊張した生活＞や、日本と違って＜交通機関や生活環境の整備の不十分さ＞。また、国の歴史や宗教の違いから、悩みの相談などは学校の先生に話すよりも、教会が担うことが多く＜宗教によるメンタルヘルスの安定＞、食生活の違いによる＜健康意識の低さ＞があげられた。

〔母国の教師と社会的認識〕では、教師の社会的地位や給与、教師に対する敬意の低さなど＜ブラジルの教師の社会的地位の低さと待遇の悪さ＞、また教育法の違いによる＜教員養成カリキュラム＞に違いがみられた。しかしながらブラジルも日本も＜教師としての使命感や努力する姿勢＞に変わりはありません。

〔母国の学校生活〕として、ブラジルでは＜午前と午後の二部制による教育課程＞に基づき、学校が定めた教科書を使用していることや時間割が午前と午後の二部制であること、また貧富の差が激しいため、中流階級以上の家庭などは私立学校に通学させ、お稽古などの学校外の活動に

も差があるといった＜私立学校と公立学校の教育格差＞があげられた。学校以外では教師が担う教育の役割は教科の授業を教える場であり、進路指導のための二者面談や三者面談は行っていない等、家庭での問題には日本のように立ち入らないことであった。＜家庭で行う子供のしつけと役割＞では、子供の教育は親の責任が最も強く、家庭において教育されていた。また、規則正しい生活を行っていること、家族の状態が健康であって初めて子どもが健康になるということ、気持ちの明るい子供などであった。

「幸せで、ちゃんと食べていて、精神的にサポートされて、バランスの良い家族環境で生活する子供(g-7)」、「学校でも家庭でも大人の問題に影響されない子供(i-9)」、「健康な子どもはちゃんとした家族、ちゃんとした家、ちゃんとした食事、ちゃんとした教育と自由な時間を持っていることだと思います。(m-8)」、「精神と心も安定していて健康な子供の事だと思います。それはスポーツをしたり、遊びに行ったり、外出したり、ご両親と良いコミュニケーションをとっている子どもたちの事で、コミュニケーションも子供の成長にとっても重要だからです (n-10)」 「健康な子供というのはフレンチフライやスナック菓子などの代わりにより多くのナチュラルフードを食べていると思います。もちろん簡単な事ではないかもしれませんが、しかし私達はいつも推奨しています。例えば、ケーキが食べたいのなら、すくなくとも自宅で自分で作るとか。ソーダやコーラなどの清涼飲料水を飲むのは週末や特別な日だけにするなどよく指摘しています。(C-14)」

また、ブラジルの学校では、＜様々な国籍の子どもが在籍＞している。

すなわち、【母国の生活文化と教育】では、母国ブラジルの治安の悪さや宗教への信仰、ハグ等の生活文化、社会環境、また教育に関しては、心身ともに安定した健康な子供の育成のもとに、教師への社会的な地位の低さ、親や教師の認識や役割、午前午後への二部制による教育課程、貧富の差による教育格差等の状況が示された。

## 4. 考察

### 4-1 ブラジル人学校の子供の健康課題

ブラジル人学校の子供の健康課題として、アレルギー疾患、インフルエンザなどの感染症の罹患、う歯や視力低下、肥満といった日本の学校とあまり変わらない健康課題であることが明らかになった。その一方で、居住地域の状態に伴う呼吸器関係の病気の多さ、また転校や引っ越しの多さに伴う精神的な不安定さや鬱といった精神的な問題が挙げられ、ブラジル人学校に通う子供に特徴的な健康課題としても示された。大谷<sup>19)</sup>は日本に在住するブラジル人は気管支喘息やアトピー性皮膚炎に罹患する割合が多いと報告しており、本研究結果とも共通している。出稼ぎとして来日しているブラジル人の多くは、生産業に従事している割合が多く<sup>10)</sup>、居住地域である工業地帯近隣にブラジル人学校があるため、呼吸器関係の病気の多さが挙げられたと考える。また、ブラジル人学校を対象に学校健診を実施した結果から、日本の子供たちと比較して肥満と肥満傾向の判定者や視力低下が多い、また日本の子供たちと同様に「要医療」と判定された内訳においては歯科が一番多いことが報告されている<sup>18)22)23)</sup>。佐藤ら<sup>22)</sup>は視力低下の多い理由として保護者が労働者であり帰宅が遅いため、子供たちは夜遅くまでゲームやテレビを見るなどの不規則な生活を行っていることが背景として考えられると述べている。また、出稼ぎとして来日するブラジル人は健康保険に加入していない場合もあり、日本語の言語力に不安があるため受診を避

けたりする場合が多いことが報告されており<sup>19)</sup>、それがう歯の多さや視力低下の多さの要因となっていると考える。

子供の生活習慣として、偏食や栄養バランスの欠けた食事、学校生活以外での遊ぶ時間の不足、ゲーム・パソコン・携帯電話の使用時間の長さといったブラジル人学校に通う子供たちの特徴的な健康生活が明らかとなった。偏食や栄養バランスの欠けた食事では、日本の公立学校に通っているブラジル人の子供の中には日本食になじむことができないため、学校での給食を最低限の量しか食べることができず、家庭でポテトチップスなどの菓子類を食べるなどの偏食・栄養バランスの欠けた食生活を課題としてあげていたり、子供たちを日本食に慣れさせるために学校行事では日本食を出したり、日本の調味料を使用したブラジルの食事を学校で提供するなど日本食に慣れるための工夫を行ったりしていることがあげられた。

ブラジルでは肉食が中心の食文化であること、日本では刺身を食べることや果物の摂取量の少なさ、加工食品の多さ、ファーストフードの多さ、調味料、砂糖を使用した料理などの食文化があげられた。ブラジルの食文化として、コーヒーしか飲まず朝食の量は少なく、夕食の量が多いなどの食習慣の違いがみられた。その一方で、ブラジルに在住している日系ブラジル人は納豆や味噌汁など日本食を食べる習慣があるため、来日してからの食生活に違いがないということや刺身や生魚などは日本での生活の中で徐々に食べられるようになっていた。福島ら<sup>28)</sup>は日本に居住した日系ブラジル人の来日後の食物摂取量の変化として肉、果実摂取量の減少と魚の摂取量の増加した者が多いことを報告しており、福島ら<sup>37)</sup>の報告と共通する結果であった。また、大谷<sup>19)</sup>は約4割が朝食欠食をしており、食べてもコーヒーを飲むだけという子供も少なくないこと、保護者の間違った知識から栄養ドリンクを朝食の代わり与えられている子供もおり、十分に朝食を食べていない子供は集中力の低下や倦怠感を訴える事が多いため学校や託児施設で朝食提供を行っていることを報告している。木村<sup>29)</sup>は兵庫県A市において日本の小・中・高校生における横断的な食習慣と生活習慣の比較を行っており、朝食摂取頻度はいずれの校種においても7割を超え、その食事内容はごはんやパンが多く、たまご料理や豆料理など主菜を摂取している割合が半数を超えていた。また、長沼ら<sup>30)</sup>はブラジルにおける日系ブラジル人の食事はブラジルと日本食が混じりあったという食習慣であり、日本に在住する日系ブラジル人の食習慣もその食習慣を維持し、自分達の労働条件や味覚に合った食料品や調味料を取り込み、日系ブラジル人の食事は、父母、祖父母から受け継いだ習慣や周囲の環境などによって個人差がみられることを報告しており、本研究の結果と共通している。

石戸ら<sup>11)</sup>は外国人児童・生徒の課題として日常生活や食生活の違いによって戸惑いを感じていることを報告している。また、学校生活以外での遊ぶ時間の不足、ゲーム・パソコン・携帯電話の使用時間の長さでは日本人の友人が少ないことや保護者の仕事が多忙であることが原因ともなっていることが明らかとなった。小内<sup>5)</sup>はブラジル人学校に通う子供たちの交友関係の少なさを述べており、本研究の結果とも共通している。また、ブラジル人学校に通う子供たちの多くはスクールバスで通っており、自宅が散在している。そのため、日本人の友人が少ないブラジル人の子供たちは帰宅後、外で遊ぶのではなく、ゲームや携帯電話の使用が多くなってしまうと考えられる。また、掛札ら<sup>13)</sup>は学校生活適応におけるメンタルヘルス上のリスクファクターについて日本人の友人を作る過程の大前提として日本語の上達が必要であり、日本人生徒からのアプローチはほとんどないと指摘している。また、発音の不明瞭さや日本人生徒との話題についていけないことなどによって学校不適応を抱えていると述べており、日本語の語学力不足や日本の教育

課程、友人関係への不適応が日本の公立学校への不適応や日本人との交流のなさにつながっていると考えられる。

教職員の健康観としてバランスの良い家庭環境で生活する子供や、健康な食生活と生活習慣を持つ子供といった良好な家庭環境やバランスのとれた食生活、生活習慣の中で成長する子供と考えていることが示された。大谷<sup>19)</sup>は、日系ブラジル人の子供たちが抱える健康課題の背景には、食生活、保護者の労働条件、金銭問題、公共との関わりがあると報告しており、様々な健康課題を抱えた子供たちと日々接する中で、家庭環境や食生活、生活習慣に視点をおいた健康観がブラジル人学校の教師の中に形成されていると考える。

#### 4-2 ブラジル人学校の子供の学校生活と教育課題

ブラジル人学校の教員は、学校生活以外での積極的な子供との関わりや、子供の問題解決のための教職員による両親へのアドバイスがあげられ、教職員は親や子供との近しい関係を保ち、課題解決に取り組んでいることが明らかとなった。教職員は保護者と子供との関わり不足、愛情不足を課題としてあげている。その原因として、親の仕事の多忙さや言語力不足が挙げられた。そのため、子供の学習や学校での生活の様子、子供の抱える問題について親と小まめな連絡をとったり、保護者の代わりに受診や休日に祭りやキャンプに連れて行ったりするなどの課外活動を積極的に行っていた。岩村<sup>8)</sup>はブラジル人学校の生徒の生活実態と学業等との関連について報告しており、子供たちの悩みとして勉強が最も多くあげられ、学習態度に対する自己評価と相関が見られた要因として、家庭での勉強や学校の先生との会話の量が多いほど自己評価が高いことを述べている。また、拝野<sup>24)</sup>は、出稼ぎのブラジル人の親は教育に無関心であり、子供の教育の連続性に配慮せず、よりよい仕事を求めて日本国内を移動したり、ブラジルと日本の行き来を繰り返したりしているため、学校を「子どもを長時間預ける場所」と認識しており、子供たちはブラジル、日本のいずれの国においても満足な教育を受けられないと述べている。また、保護者会や授業参観へ参加しないことや、子供の忘れ物が多い、宿題をやらないなど教育に対して無関心であるように映っているが、労働条件の悪さや社会的立場の低さ、日本語が話せても読み書きができないため子供と一緒に宿題ができないなど保護者の言語力を考慮すべきであると述べている。また、教育に対して熱心な親や子供の教育に悩んでいる親も多いことを指摘している。谷淵<sup>25)</sup>も日本人の親よりブラジル人の親の方が学校行事に参加する頻度及び学校からの配布物を見る頻度が少ないが、日本人の親に比べて高学歴志向が高いこと、また、ブラジル人親子の特徴として、日本人と比較すると子供への期待と愛情が強いと述べている。また、谷淵<sup>25)</sup>は親が子供の友達の親と交流する頻度や地域活動に参加する頻度が高いほど、子供の授業理解、興味関心、登校意欲が高いことも報告している。渡辺<sup>26)</sup>は日本人の勤勉さや真面目さは、ブラジルでの社会的信用が高いため、子供がそれらを身につけることや高い教育水準を期待しているが、勉強に関わる時間が少なく、学校に任せっきりになってしまう現状もあると報告している。

文部科学省の諸外国の学制についての調査報告書<sup>31)</sup>ではブラジルの教育課程は児童教育、基礎学校教育、中等教育、高等教育の大きく4つに分けられている。日本の教育課程における小学校と中学校はブラジルの教育課程において基礎学校教育に分類され、義務教育にあたるため、小学校と中学校では日本のように明確な区切りはなく、ブラジル人の子供たちにとって小学校から中学校へ進学する際に指導方法の違いや厳しさを感じ、不適応を生じさせていると考えられる。拝野<sup>24)</sup>によるとブラジル人学校で使用されている教科書はブラジルから取り寄せている場合が多い

ことや、ブラジルの教育関連法規に準拠した教育課程で教育を行っていることを報告しており、本研究結果とも共通している。

また、ブラジル人学校における教育課題として、日本語とポルトガル語能力の言語力不足による課題、日本の文化への不適応、確立できないアイデンティティーによる子供の精神的な不安定さ、引っ越しと転校の多さに伴う子供の精神的な不安定さ、ブラジルの文化や歴史、言葉を知らずに成長するなど学習や日本人との人間関係の形成、高校・大学への進学において困難を抱えていることが明らかとなった。確立できないアイデンティティーによる子供の精神的な不安定さを抱えている子どもに対する支援として、ブラジルの文化を意識した子供への指導でブラジルの文化の紹介、日本の文化を意識した指導では日本の文化の指導が行われている。ブラジル人学校に通う子供たちの中には、言語力不足やブラジルへ帰ることができず、ブラジルの文化や日常生活などの体験をしたことがないため、アイデンティティーの確立がされず、落ち込みを抱えている。それに対する支援としてブラジルの音楽や詩、食事などの文化を積極的に伝えることや、日本の文化も同様に伝えることを大切にしている。在日外国人児童・生徒の精神的諸問題と多文化的支援において言語環境の問題、家族内が抱える問題、第二世代の子供たちのアイデンティティーの確立において課題があり、自分らしさという意味の自我同一性と、所属する地域らしさという意味の文化同一性の二つの面が存在し、特に文化同一性の確立への支援が重要である<sup>27)</sup>。また、滞日日系ブラジル人の抑うつ症状と文化的所属感およびサポート・ネットワークの関連について、ブラジルへの所属感を保ちつつ、適度に日本の文化に馴染んでいる状態が最も抑うつ傾向になりやすいと報告されている<sup>21)</sup>。つまり、ブラジル人学校の子供の教育課題に対して、母語、日本語という言葉の指導だけでなく、ブラジルの文化や日本の文化の指導や日本人と積極的に交流の機会を作ることにより、子供の学習意欲を高めることを意識しているのであった。

子供の教育への両親の課題については、両親の職業の不安定さによる子供の教育への計画性や責任のなさ、両親の職業の多忙さによる子供の関わり不足が挙げられ、子供の教育と両親の課題は密接に関係していることが明らかになった。景気の減退に伴って多くの外国人が失業している状況にあり、親の就労状況や収入が子供の教育に大きな影響をもつこと、教育費が払えないことによる子供の不登校、社会からの孤立などから、親は意欲を失って精神的に不安定になり、子供へも余裕のない関わりしかできず、教育に無関心になりがちでもある<sup>17)</sup>。また、帰国願望が高くブラジル人学校に通わせている親は、ブラジル人学校の高い授業料が払えなくなり、子供を公立学校へ転校させる場合も多く、帰国を前提にブラジル人学校を選択するも、帰国費用を学費などに使用するため長期滞日に繋がったり、日本の公立学校に馴染めなかったりして教育の連続性が失われるため、不登校になってしまう子供も多い<sup>24)</sup>。保護者の雇用の不安定さや引っ越しと転校の多さによる頻繁な環境の変化や、保護者が帰国するのか日本に住むのかについて優柔不断であることが原因となり、子供の学習へのやる気を消失させてしまっていると考えられる。また、ブラジル人学校の経営の困難さとして、ブラジル人学校の厳しい経営状況や、日本の公立学校との学籍移動の困難さがあげられた。日系ブラジル人児童生徒の問題には親の態度が大きく影響しており、頻回な転校や来日など親の事情に振り回されることにより、子供は日本での就学や勉強に消極的になっている<sup>12)</sup>。

#### 4-3 研究の限界と今後の課題

在日ブラジル人学校に通う子供たちはブラジルの食生活を維持し、日本と異なる文化や価値観

の影響を受け生活をしてきた。また、日本のブラジル人学校に通う子供たちは、保護者の仕事の多忙さや就労状況の不安定さ、ブラジルに帰国するか日本で定住するかに対しての保護者の迷いなどが要因となって転校や引っ越しを繰り返し、学習習慣が身に付きにくいことが課題であると考える。

中央教育審議会の答申<sup>32)</sup>では新たな課題への対応として、帰国・外国人児童生徒の増加や母語の多様化、学校への在籍における散在化、集住化が進展していることを踏まえ、学校生活への円滑な適応や日本語指導などについて、個々の児童に応じたきめ細やかな指導を行うための体制整備の必要性を述べている。また、文部科学省初等教育局国際教育課<sup>33)</sup>より外国人児童生徒の受入の手引きが出されるなど、日本の公立学校における外国人児童生徒の受入ときめ細やかな支援体制の確立が必要であると考えられる。

ブラジルの文化や価値観の影響を受けた生活をしている子供たちに対し、ブラジル人学校教職員は、親と頻りに連絡を取って学校内外において支援を行い、言語の指導として、ブラジルと日本の文化を紹介し、日本人と交流する機会を積極的に持つなど、子供の学習意欲を高めるための様々な工夫をしている。このような、母語や母文化とは異なる環境で学び、社会・経済的な条件が変動する中、様々な困難を抱えている子供たちへの理解を深め、ブラジル人学校での子供への支援内容や親とのかかわり方等、子供たちの持つ多様な文化的背景等を踏まえつつ支援する必要がある。

本研究は、関東・中部地区の8校のブラジル人学校教職員を対象としており、限られた地域であった。また、日本の公立学校とブラジル人学校との間の転校を繰り返す子供たちの実態も見られたことから、今後、日本に在住するブラジル人の子供たちにおける健康生活と支援の方向性を明らかにするために、日本の公立学校に通うブラジル人の子供たちに対象を広げ、健康や学校生活の課題における共通点や相違点を元に調査をする必要がある。

#### 引用文献

- 1) 法務省「出入国管理及び難民認定法第七条第一項第二号の規定に基づき同法別表第一の五の表の下欄に掲げる活動を定める件」  
[https://www.moj.go.jp/isa/laws/nyuukokukanri05\\_00017.html](https://www.moj.go.jp/isa/laws/nyuukokukanri05_00017.html) (最終アクセス 2022/2/26)
- 2) 文部科学省「2019年学校基本調査」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm)  
(最終アクセス 2022/2/26)
- 3) 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(2020年度)の結果について」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/nihongo/1266536.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongo/1266536.htm) (最終アクセス 2022/2/26)
- 4) 文部科学省「2019年大学入学資格」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shikaku/07111314.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111314.htm) (最終アクセス 2022/2/27)
- 5) 小内透, 「在日ブラジル人の教育と保育-群馬県太田・大泉地区を事例として-」教育社会学研, 74, 351-353, 2004
- 6) 関口智子, 「在日日系ブラジル人の子どもたち」, 明石書店, 2003
- 7) 宮島喬, 「文化と不平等 社会学的アプローチ」, 有斐閣, 東京, 191-232, 1999
- 8) 岩村ウィリアン雅浩, 「ブラジル人学校生徒の生活実態と生活意識」, 名古屋大学大学院教育発

達科学研究科紀要第 53 (2), 147-161, 2006

- 9) 飯田俊郎, 「日系ブラジル人のトランショナルな生活世界」, 『調査と社会理論』・研究報告書 (21), 15-22, 2006
- 10) 近藤敏夫, 「日系ブラジル人の就労と生活」, 社会学部論集 40, 1-18, 2005
- 11) 石戸教嗣, 「埼玉県における『日本語を母語としない中学生』一生徒・保護者への質問紙調査報告書一」, 埼玉大学教育学部教育社会学研究室, 1-78, 2014
- 12) 朝倉隆司, 「日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連-愛知県下 2 市の公立小・中学校における調査から-」, 学校保健研究 46, 628-647, 2005
- 13) 掛札綾・鄭仁豪「日本における日系ブラジル人生徒の学校適応生活に関する研究; 適応感と対処行動による検討」, 留学生教育 8, 79-110, 2003
- 14) 掛札 綾, 「日系ブラジル人生徒のメンタルヘルスに関する研究-異文化要因の影響から見た学校生活適応におけるリスクファクターについて -」, こころと文化 3 (1), 67-71, 2004
- 15) 金山 聖菜, 「在日ブラジル人児童の心理適応 (1) 集住地区と散在地区の比較」, 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集 14, 21-28, 2014
- 16) 児島明, 「ブラジル人学校の教師であること」, 鳥取大学地域学部紀要 10 (2), 45-61, 2013
- 17) 藤本和栄, 「日系ブラジル人子どもの生活課題- 自律をうながす支援の方策-」, 佛教大学大学院社会福祉学研究科篇41, 45-62, 2013
- 18) 小島祥美, 「ブラジル人学校における日本の学校健診モデルの適用の可能性」, 学校保健研究 56, 427-434, 2015
- 19) 大谷かがり, 「日系ブラジル人の子供の健康を守る」, 地域問題研究NO. 24, 2-9, 2007
- 20) 佐藤由美ら, 「在日ブラジル人学校に通う児童・生徒を対象にした健康診断の取り組み」, 保健師ジャーナル66 (11), 996-1001, 2010
- 21) 松岡正典・児玉憲一, 「滞日日系ブラジル人の抑うつ症状と文化的所属感およびサポート・ネットワークの関連」, コミュニティ心理学研究 9 (1), 1-13, 2005
- 22) 佐藤由美ら, 「在日ブラジル人学校に通う児童・生徒を対象にした健康診断の取り組み」, 保健師ジャーナル 66 (11), 996-1001, 2010
- 23) 宮原香里, 「在日ブラジル人の子どもたちが地域で健康に暮らしていくための支援 健康診断からみえてきた展望と課題」 保健師ジャーナル 68 (9), 765-768, 2012
- 24) 拝野寿美子, 「越境する青少年のキャリア選択に関する研究 ブラジル人学校就学者の事例を中心に」, 東京学芸大学, 博士 (教育学), 甲第 119 号, 2008
- 25) 谷渕真也, 「滞日日系ブラジル人の学校適応、親子関係及び地域参加に関するコミュニティ心理学調査-同一地域の日本人親子との比較を中心に-」, 広島大学大学院教育学研究科紀要 (58), 183-192, 2009
- 26) 渡辺雅子編, 「共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 (上) 論文篇・就労と生活」, 明石書店, 1995
- 27) 阿部裕, 「在日外国人児童・生徒の精神科的諸問題と多文化的支援 : 教育・家族・地域に焦点を当てたヒアリング調査から見えてきたもの」 シリーズ多言語・多文化協働実践研究 (2), 102-110, 2008
- 28) 福島哲仁, 「日本に移住した日系ブラジル人から見た日本の生活と健康問題」, 日農医誌, 52 (2), 209-216, 2033
- 29) 木村悦子, 「小中高校生における断面的な食・生活習慣の比較」, 学校保健研究 56 (3), 208-



218, 2014

- 30) 長沼理恵, 「地方都市で働く日系ブラジル人の食生活行動に関する記述的研究」 日本地域看護学会誌 8(2), 28-35, 2006-03-24
- 31) WIP ジャパン株式会社, 「文部科学省委託調査『教育改革の総合的推進に関する調査研究～諸外国における学生に関する改革の状況調査～』報告書」, 100-109, 2014
- 32) 中央教育審議会, 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」, 2015
- 33) 文部科学省初等中等教育局国際教育課「外国人児童生徒受入れの手引き」, 2011

(2022年3月31日提出)

(2022年5月7日受理)

# **Life and Health for Children of Brazilian School in Japan Part I: Interviews Surveys with Brazilian School Teachers**

**TAKEI, Yuma**

Tokyo Gakugei University Senior High School

**NAKASHITA, Tomiko**

Faculty of Nursing, Gunma Paz University

**SAITO, Chikage**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

**Objective:** To clarify the current situation and problems related to the life and health of children attending Brazilian schools in Japan.

**Methods:** Interview survey using semi-structured interview was conducted with 26 teachers working in 8 Brazilian schools in Kanto and Chubu districts, for performing a qualitative and inductive analysis.

**Results:** Participants were educating the children to include their home country and Japan taking into account “the children’s native life culture and education”, were recognized “the health issues of Brazilian school children, which were not much different from Japanese schools”.

**Conclusion:** This study revealed that the children had difficulties in their future career paths due to their lack of Japanese and Portuguese language skills, maladjustment to Japanese culture, and mental instability. It was suggested that it is necessary to provide support for foreign children living in Japan based on their diverse cultural backgrounds.

Key word : Brazilian School in Japan, children, life, health